

# 「あ、か、さ、た、な」で能力を考える

天畠  
大輔

TEMBATA  
Daisuke

自分一人では歩けない、話せない、読めない、パソコンを打つこともできない。でも頭の中はこんなに考えが巡っている。どうしたら自分の能力を人に認めてもらえるだろうか……。

私は一四歳の時、発話困難な重度身体障がい者になりました。名門中学校に入り、イギリス留学をしたものの、体調を崩してすぐに一時帰国することに。その際、医療過誤によって、低酸素脳症になりました。一度脳死と判定されるなど生死を彷徨いましたが、なんとか生還。後遺症として四肢麻痺、視覚障がい、発話障がい、嚥下障がいが残りました。

倒れてから半年間は、外に意思を伝えることがまったくできず、閉じ込め症候群の状態でした。主治医は「この子は知能も幼児レベルまで低下している」と両親に説明していました。母はその診断を信じませんでした。私のかすかな反応を見逃さず、周りの言葉を理解していると確信し、独自のコミュニケーション方法を見つけてくれたのです。それは「あ、か、さ、

た、な……」と五十音を他者に読み上げてもらい、私を手を引くなどの合図を送り、一つ一つ文字を確定させていく方法でした。「あ、か、さ、た、な話法」と名づけたこのコミュニケーションのおかげで、私は再び他者とならがり、社会の中で生きていけるようになりました。

現在私は二十四時間介助を受けながら、一人暮らしをしています。主な仕事は研究で、中央大学にて、重度障がい者の生存保障や介助者との関係性について研究を行っています。私が研究者を志した理由は、自分には「思考する」能力が残され、それを活かすには学問・研究の道しかないと思ったからです。自分の能力を社会に認めてもらうには、論文を書き、研究者としての地位を得る必要があると考えたからです。

この「あ、か、さ、た、な話法」は、私が意思を伝えるのにもとも時間がかかることと、その言葉が最終的には私の口ではなく、介助者の口から発せられるという特徴があります。そして、時間や労力の節約のため、介助者には積極

的な先読みを推奨しています。文字をすべて読み取らなくとも、私の言いたいことを想像や解釈で補う方法です。そのため、特に私とはじめて会う人には「本当にこの人が言っている言葉なの？」と疑問をもたれることがあります。そこで、時間をかけて思考をまとめ、文章に残すことができる論文は、私の能力を証明する方法としてとても適しているのではないかと考えたのです。

しかし、それは「諸刃の剣」でした。なぜなら、研究支援を担う介助者は私と一緒に研究知識を積み上げていきます。そのおかげで、私の思考の解読が大変スムーズになり、より少ない読み取りで、文章化が可能になっていきます。一方で、介助者が「大輔さんが言いたいのは何かしてこういうことですか？」と先読みする際に、私が気づきもしなかった鋭い考察が発せられることも出てきました。私は、自分の主張から大きくズレない内容であり、論文の質を高めるために有用であると判断した場合には、積極的に介助者の提案を受け入れていきます。しかし、こうしたことが繰り返し起こることによって、私の中に「能力の水増し」という言葉が浮かび上がってきました。この「能力の水増し」による強いジレンマを当事者研究という手法によって徹底的に深掘りし、まとめたものが私の博士論文です。

また一方で、この論文を執筆している最中に自分の思想を揺るがす大変ショッキングな事件が起こりました。二〇一六年の「相模原障害者施設殺傷事件」です。元施設職員植松聖が「意思疎通のできない障がい者は不幸であり、安楽死させるべきだ」という持論から、津久井やまゆり園の入所者の命を数多く奪いました。

私はこの事件を知ったとき、二つの大きな脅威を感じました。一つは、もし自分がその現場にいたら間違いなく殺されていたであろうということ。彼の主張には賛同を示す世間の反応も聞かれ、私は優生思想社会では最も弱い立場にあることを突きつけられました。もう一つは、そんな私の中にも優生思想が潜んでいるということです。私は自分の能力をもっともつと高め、社会に評価されたいと願っています。それは、裏を返せば、能力のない自分は生きる価値がないのではないかと、どこかで思っているということです。

この相反するような二つの感情は、今取り組んでいる、介助付き就労の研究プロジェクトでも、私の前に立ち現れます。

二〇二〇年度から、重度障がい者でも介助を使って働ける制度が一部の自治体で始まり、私はこの制度の調査を含め、重度障がい者でも就労しやすい社会の実現に向けて研究活動を進めています。

しかし、この研究の必要性を確信しつつも、「これは能力の証明がしたいだけではないのか？」と、ふと立ち止まる時があるのです。何故なら、介助付き就労が進めば、そこには「働ける障がい者」と「働けない障がい者」という分断が深まります。私は、「自分は働ける障がい者である」と証明し、自分の地位を安泰化させたいだけではないのか、と自問してしまうのです。「介助者が必要」という点だけで、仕事のチャンスが大幅に制限されている社会は変えたいと思う。自己実現のチャンスを保障してほしい。しかし、自分がそうした社会変革を進める一方で、そこから取り残される人たちが必ず生まれます。

すでに事件が起きて五年の月日がたちましたが、この夏、私は津久井やまゆり園に行きました。彼らの存在と、彼らの遺したことを忘れないために。

\*閉じ込め症候群とは、人が随意に動かすことのできる部分はどこも動かなくなる状態を指す。トータリ・ロックトイン・ステートとも呼ぶことがある。詳しくは、立岩真也「ALS 不動の身体と息する機械」(医学書院、二〇〇四)、三八〇頁を参照。

(でんばた だいすけ・日本学術振興会特別研究員 P D/中央大学)  
著書に、「弱さ」を(強みに)——突然複数の障がいをもった僕ができること(岩波新書、二〇二二)など。